

雲南調査記

殿村 晋一

「社研」の雲南調査団が成田に集合した日は、アメリカがフランス・ドイツ・ロシアなどのイラク査察継続の主張を無視し、国連安保理決議の手続きを経ずに、単独でイラク侵攻に踏み切ることが決定的な状況になっていたときである。最長老の儀我先生が「アメリカの終わりの始まり」の日という歴史的瞬間にこの調査旅行がおこなわれるという言葉で結団の挨拶をされたことが印象的であった。また、新型肺炎（SARS）がハノイや香港で流行し始めているという報道は知っていたが、雲南省がベトナム・ハノイのすぐ北に位置していても、それが現在の猖獗状態を生み出すことなどは夢にも思わず、昆明のホテルのテレビ（NHKのBS1）の放送で香港等の状況が次第に深刻になっていることは承知していたが、帰国して家族から「雲南は大丈夫でした」といわれてはじめて、「そういえば、俺は中国を旅行してきたんだ」「しかし別に体調が悪いわけでもなし」とタカをくくることができた。空港での検疫が強化されたのはわれわれが帰国してから1週間もあとのことだったのである。われわれの調査旅行は、この二つの歴史的瞬間の合間をぬって行なわれたのである。

成田を後に西に向かった飛行機は上海市の東側の海に面した新空港に到着し、バスが、中国がほこる「別になくても良い—男性バスガイド」「リニア新線」にそって、これまた東洋一の「タワー」に向けてわれわれを運んでくれた。「タワー」からの眺めは残念ながらガスっており、わずかに足元の「バンド」（かつての租界の中心）の一部を見ることができた。「お茶をどうぞ」というガイドさんに連れられて、バンドの「お茶屋」に行く。数人が早くも買い物を始めたが、ガイドが用意した集合写真を買う人はさすがに一人もいなかった。

翌日、乗り継ぎの飛行機は上海市の西側の旧国際空港から昆明に向けて飛び立った。前日の雨はやみ、快適なフライト。ちょうど日本から上海までに要した4時間をかけて飛行機は昆明に近づく。幾筋もの谷筋を眼下にしながらい飛行機は高度を下げていく。飛行機は気流の尾根をワープするたびにガタガタゆれた。後ろの座席に座っている飛行機嫌いのS氏がその度に座席の袖を握り締めるのが窓に額をつけて眼下の変化を見逃すまいとしている私の目に写る。あちこちに、草木が生えるのを押さえつけるかのごとく、赤褐色の土が蟹の甲羅を伏せたように点在しているのが見える。あとで確認したが、極めて鉄分の多い土壌とのことであった。赤褐色の円形脱毛症にかかった森林地帯をすぎると、昆明湖が真上からの陽光を受けて縮緬のごとき水面を見せている。飛行機は何事もなかったようにゴトンという軽い着陸音とともに昆明空港に到着した。

昆明空港の売店で中国の基石と碁笥のセットを見つけ、飛びついて購入した。何と表示価格の二割引で300円でいいという。邦貨にして4500円である。基石は表面が丸みを帯び、底が平らなので、ペタンと置く感じになる。碁笥がすごい。黒にカーキ色が斑に入っている大理石(?)を削り貫いた本格派である。黒石はミャンマーから輸入する原石を使っていること、光にかざしてみると深い緑色が積み重なっているのが分かる・・・等などについては、のちに観光名所「石林」近くの売店の店員の説明で知ったことであるが、なによりも驚いたのは、その売店の基石・碁笥セットの値段が、全く同じ物で十倍以上もしたことである。この辺の事情についてはまた後に触れることにしよう。

われわれは同じ飛行機で麗江に向かった。巨大な山の背を二つほど超えて1時間ほどで雪山^{せつざん}が見え、麗江空港に到着した。空港を出ると菜の花が咲く田園風景と2・3の看板がわれわれを出迎えてくれた。ほかは何もない。この地域を中心に生活しているナシ族の民族衣装をつけた二十歳^{はたあ}をわずかに越えたばかりの女性ガイドの「日本語」の説明を聴きながらバスは麗江市に向かったが、途中わずかばかりの水田を見かけただけで、あとは畑地だけで、かなりの酸性土壌である。土地生産性は決して高くないようだ。海拔2500mの高地だけにいやに松ノ木が多い。松茸が採れ、日本に輸出されていることは知っていたが、ときは3月、生の松茸にはありつけなかった。スライスされた乾燥松茸を家族へのみやげとして購入したが、ほかに購入した3種類の乾燥キノコの三倍ほどの結構なお値段であった。

雪山^{せつざん}を含む麗江市一帯は『世界遺産』の指定を受けている。麗江の町は、元来チベット方面に向かう交易路の出発点で、ガイドさんは南シルクロードと呼んでいたが、正確には西南シルクロードの一分枝がここからはじまり、「茶馬交易」と総称される交易が連綿として営まれてきたところである。ヤクと背の低いやせ馬が観光地で記念撮影と有料騎乗用に動員されていたが、ナシ族の生業は「遊牧」だったという。このため、わずかばかりの耕地を耕すのは女性の専業であった。ナシ族の女性の民族衣装の背中部分に七つの丸いマークがつけられているが、これは北斗七星をあらわすもので、朝早くまだ星が望めるときから、夜星が輝きを増してくるときまで野良で働くことを意味している、とガイドさんは説明してくれた。「ナシ族の女性は働き者で、男性は全くの怠け者だ」とガイドさんは胸を張っていたが、過半の収入が男性の遊牧に依存していたことは確かであろう。そして彼ら男性は商品の運搬にもかかわった。きびしい山岳路を命がけで踏破する男性とわずかばかりの農地（現在は主にコンニャクを生産している）で生計を維持する男女間の分業体制がこのような状況を生み出したものであろう。平地に帰ってきた男性はつかの間の休息を取り、平地の一切の仕事は女性の分担とされる慣習が生まれたものと思われる。

『世界遺産』の中心をなすのは、その昔、取引が行われ、隊商が集結した「市場街区」であ

る。現在は、観光客目当ての土産物の売店が、ごろ石で「舗装」した幅 2mほどの狭い道路をはさんで軒を連ねている。小さな谷川をはさむようなかたちで傾斜地にしがみつくように建てられている家並に石段を交えた迷路のような道が家々の軒下を縦横につないでいる。凸凹で、滑りやすいこの石道は、坐骨神経痛を抱える筆者にはつらいものがあつた。この地域に住む少数民族がそれぞれの民芸品を並べて客を呼んでいる。さしずめ、北海道のアイヌ村に複数の少数民族が集まっていると思えばいい。木彫り細工、染物、金属細工、少数民族の衣装をまとった人形などが四・五坪ほどの店内に所狭しと置いてある。観光客用にフィルムを売っている店もあつたが、変わったところではインターネットを有料で利用できる店もできていた。店舗が並ぶ通りの狭い路地をうらに入ると、いわゆる「旅籠」もある。食堂もある。何もかも雑居している。

ここでの最大の「目玉商品」は、ナシ族が古くから（正確にはわからない）使用していた独特の象形文字による印鑑である。ツーリストと契約しているお店で漢字でこちらの苗字を伝えておくと、翌日には手元に届くのである。絵文字との関係で、出来上がりは印鑑というよりも日本の郵便局で使用しているスタンプのようなかたちである。

このナシ文字は、表意・象形文字（トンバ文字）と表音文字（コバ文字）の2種類があるという。いずれも主として巫師（シャーマン。トンバと呼ばれる）が使い、一般の人びとには読めない。このことからこの文字はトンバ文字とも呼ばれる。トンバ文字はいわゆる絵文字であつて、まさに象形文字である。甲骨文字（甲骨文）とよく似ている。世界の文字のなかで、いわば（生きている化石）として貴重な存在である。すべて手書きで、それも言葉の順序どおりに並べて記入しないという特徴をもち、巫師が代々口誦で伝え、種々の助詞を補って読む、という。

われわれはこの文字を自在に扱える老先生の姿を市の博物館で直接見ることができた。ガイドさんの話では、この〈生きた化石〉のような先生を中心に若い人たちにこれを伝えるための研究施設が設立され、確実に伝習事業が進んでいるが、老先生は最近体調が優れず、入院中ですとのことであつたが、市の博物館にしてみると、この老先生が（病あがりでお寝れの様子ではあつたが、80代と見受けられた）色紙に揮毫しておられるところで、色紙を買い求める人の姓をそばにより添う若い女性助手が耳元で中国音で伝えるのをうなずきながら、ナシ文字で書き込んでいるところであつた。

西南シルクロードに話を戻そう。「砂漠の道（オアシス・ルート）」と「草原ルート」がすでに開かれ、前2世紀末には漢の武帝による官貿易がはじまることは良く知られているが、中国の絹は、最終消費地ローマの需要拡大に刺激されて、①カイバー峠経由でインダス川へ、②チベット・シッキム・パトナ経由でガンジス川へ、③ビルマ・シャム経由でイラワジ・サルウイ

ン両河口に運ばれ、海上ルートで、途中インドの香辛料、綿布、金、宝石をくわえてエジプト経由でローマに運ばれた。仲継地インドのクシャーン朝もこの時期絶頂期を迎えた。雲南からの出口は②は麗江、③は大理からであった。あのごろ石の市場広場にヤクの隊商が集う賑わいを今は想像すべくもないが、この地の人々の中には、すでに2000年前から仲継商業とのかかわりで生計を立てているものがいたのである。それも自分たちの運ぶ物資がいかに遠くまで運ばれていくのかを全く知らずに……。おそらく、これらのルートにおいては絹製品が高額通貨の役割を演じていたものと思われる。この市場街区もまた商業史の〈生きている化石〉である。世界遺産として後世まで大切に保存したいものである。

ナシ族の村にも行ってみた。菜の花が咲き乱れる川をはさんで集落が形成されている村は人通りも少なく、ひっそりとしていた。この村も「世界遺産」地域に含まれて保存指定を受けたとのことで、観光客を受け入れる準備が始まったばかりということであったが、すでに村人たちは伝統文様の藍染の綿布を観光客相手に売り出していた。染屋の庭先では若い女性たちが針を手にして絞り染めの準備工程（かがり）に精を出していたが、庭に並んでいる染用の道具はどう見ても現在使っているものとは見えず、藍を醗酵させる藍がめも見られなかった。麗江の町か、どこかの工場で化学染料を使って染めていることが見え見えで、いささか興ざめであった。「世界遺産」にまがい物はふさわしくない、とはいってみても、本物の藍染を一体今の中国で誰が買えるのか。自問自答しながらバスに乗り込んだ。それにしても、押し寄せる「拝金主義」はこの長閑^{のどか}な村をどう変貌させるのであろうか。

麗江で2泊した後、昆明市に移動した。昆明市はさすがに雲南省の省都だけのことがある。町並みがすっきりしており、黄砂の影響を受けないため、華北全体に見られる「黄色い埃っぽさ」が全くなく、吹き抜ける風がすがすがしい。さすがに「四時^{スーシールーチュン}如春」の町だ。一月まえに出かけたすぐ南にあるベトナムの町々の湿度の高さにくらべてまさに「別世界」の感がある。われわれは「雲南大学」と「昆明国家経済技術開発区」のお役所を訪問し、製薬工場を見学した。雲南大学との交流は、こちらが東アジア経済と日本経済に関する報告を二本用意し、雲南大学側でも陸偉東教授が「中国雲南省の少数民族についての話」、張荐貨教授が「中国の西部大開発」と題する報告をしてくださった。筆者の専門とのかかわりで言えば、前者の報告において、大理が、「観音様がやってきて」西南シルクロードの重要な拠点となったという話と、ナシ族のトンバ文字とナシ族の一部族であるモソ人の「走婚」（通い婚）の話が面白かった。お役所の「投資勧誘」対策に関する討論は別として、製薬工場の見学は漢方薬の成分を抽出してカプセルに詰めるというかたちで製品化していることを知り、今後の中国製薬の新戦略として注目したい、と思った。

雲南省博物館にもいってみた。日本の博多湾岸から出土した例の金印『漢委奴国王』より少

し前の紀元前 109 年に滇王が漢に服従したときに武帝から授けられたものとされる『滇王之印』と彫られた金印が青銅器部門の部屋の中央に据えられていた。初めて目にするのに、何か懐かしいものに再会した気がした。この部屋に陳列されているすべてをフラッシュなしでも写せるデジカメを駆使して全部写してきたが、筆者にはその解説能力はない。この部屋に関する解説は司馬遼太郎氏の『街道をゆく 20 中国・蜀と雲南のみち』に興味深い解説が載っているので、それを参照していただきたい。

司馬氏はこの著書のなかで雲南に関する注目すべき指摘をしているのでそれを紹介して本稿を締めくくりにしたい。「中国における少数民族は、五十六種というが（雲南省だけで 22 種—筆者挿入）、それぞれの先祖たちは、長い歴史のなかで低地に降り、その血液と文化を中国文明というつぼの中に溶けこませた。逆にいえば少数民族の固有文化こそ文明という普遍性に昇華する以前の細片群だと思っただが、漢民族はながくそのことを考えず、自分たちこそ華（文明）で、僻境にのこって固有文化をもちつづける集団は夷だと思ひ、華・夷は対立概念であるとしてきた。……このうち（雲南省の少数民族—筆者）、古代以来、山谷に集落をつくって稲作をしている民族たちを、私どもは自在に選んで日本稲作文化の祖にしてい。民俗がおどろくほど似ているのである。万葉の世のそのままの耀歌（歌垣に同じ）が生活している民族が多く、また日本の平安期そのままの妻問婚が生活している民族もあり、その過程として当然、若者が夜、娘の家に忍んでゆく呼ばいもある。妻問・呼ばいなどは、日本の農漁村で明治期まで生きていた。むろん、漢民俗社会や朝鮮社会ではありえないことである。」p. 217 と指摘したうえで、昆明近郊にすむイ族のもつイ語（雲南・四川・貴州・広西チワン自治区の約 550 万人が話す—ナシ文字と同じく象形字形の表意文字から表音文字に転じた文字、筆者注）にふれて、「イ族だけがぬきんでて六千年前、半坡遺跡の時代にすでに文字をもっていたなどとは、私どもの想像の規制を破壊してしまうほどのことで、にわかには合点しがたい。しかし、それを別として、半坡遺跡をたんねんにあらえば、こんにちの少数民族の羌族やイ族などチベット系のひとびとの古文化があぶり出されてくるのではないかという想像は私にもある。……私は、漢民族が固有に存在せず、歴史的に徐々にできあがって行ったものだと考えている。漢民族というものの祖形をつくった有力な要素として古代羌族があったのではないか。」p. 229 という指摘である。この羌族群には、ナシ族も含まれるのである。

最後に、話はまた現代に戻る。博物館の見学が一通りすむと、係員がさっとカーテンを開けた。そこには土産品の売店が隣接していた。われわれは石林や少数民族館の見学の際にいやというほど売店に立ち寄らされてきた。バスが休憩のため停車すると売店なのである。麗江でもそうだった。円を含む外貨を少しでも多く調達したいという中国の事情は分からないでもないが、もう買い物はほとんどの人があらかた済ませている。書画・硯・筆・香木の扇子・貴石の

衝立・骨董などどこでも並んでいるものばかりである。バイヤグラから漢方製バイヤグラまである。いずれも日本で買えばそれくらいしてもおかしくない値段がついている。筆者は、留学生や中国への留学経験のある学生から国内価格と外国人向け価格があることを聞いて知っていた。売り場の女性はこちらがほしいのに買い渋っていると見たようで、これもおまけとして付けます、あれもおまけに付けます、とさかんに売り込みをかけてくる。最後には呆れ顔でいくらなら買うか、という。筆者がいかなる値段で買ったかは差支えがあるのでここで明らかにすることはできない。

すべては為替レートのなせる業なのである。日本が1ドル=360円時代、米軍基地周辺の歓楽街が大いににぎわい、たけのこ生活を余儀なくされたひとびとから貴重な文化財や美術品がアメリカに大量に流出したことを思い起こせばいいのである。筆者が昆明空港で飛びついて購入した碁石と碁笥は国内価格で、二割引はひよっとしたら乗客に対する「特別割引」であったかもしれないのである。輸出指向型工業化路線を邁進する中国にとって今の為替レートはさしあたりやむをえないレートなのであろう。ちなみに、私の買った碁笥の蓋にはいまだに260元という正札のラベルが張り付いたままである。昆明のホテルで碁石をお孫さんへの土産として購入されたK先生には、高い買い物を見せてしまった。それでも観光地の売店の値段よりはかなり安かったことだけは付け加えておきます。

2003年6月30日脱稿